

倫理経営では、親との心の結びつきを重視しますが、それは、姿なき故人にも及びます。亡き人を思い出し、偲ぶ行為は、現代の日本人の心にも形を変えながら根づいていることが、かつて倫理研究所が行なった「日本人の死生観についての意識調査」からうかがえます。

調査結果によると、三割強の人が、今でも亡くなった人のことを頻繁に思い出しており、六割は、何かのきっかけで思い出すことがあると回答しました。また、故人を思い出すきっかけとして多かったのは、墓参、命日、お彼岸、仏壇の遺影を前にした時でした。

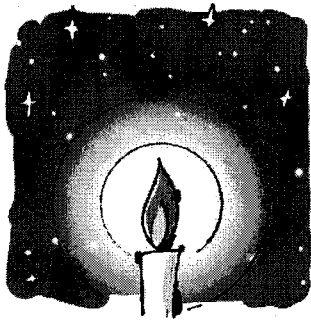
これらは、いずれも伝統的な慣習ですが、人は、ある一定の形式に触れた時に亡き人を思い出すことが多いようです。さて、亡き親や祖先を偲ぶという行為は、単なる習俗というだけでなく、実際に私たちの生活や事業経営にプラスに作用することがあります。

たとえば、ある経営者は、創業者である亡き父親の墓参で、生前の教えを思い出し、そのことを実践することで苦境を脱しました。また、ある社長は、亡き父親への感謝の念を深めたことにより、事業の立て直しへの覚悟が固まり、業績のV字回復に成功しました。

このようなことは、多くの倫理経営の実践者が体験していることですが、親祖先への感謝の思い、「純情」の心境に至った結果、表われた成果に他なりません。亡き人に対する実践方法は、先の調査結果にあった

9月のテーマ | 親祖先への感謝

## 自らの生命の原点に 思いを馳せ今を生きる



ように、定期的な墓参、遺影に向かっの朝晩の挨拶といった伝統的な形式を踏まえた実践もあれば、家のルーツや祖先の事績を調査する、親との思い出をノートに書き留めるといったことまで多岐にわたります。

倫理の実践は、環境、状況により、その形態は変幻自在です。故人を偲ぶ方法も、これといった定型はないものの、その要点をあげれば、①改まって行なう、②亡き人がそこにいると見立てる、③一定の形や作法をとるといったことになるでしょう。

いずれにしても、これらの実践者に共通していることは、自らの生命、存在の原点に思いを馳せることで、今を生き抜き、未来に向かう元気を得ていることです。

人以外の動物は故人に思いを馳せ、それを形に表わすということは行なわないでしょう。したがって、このような行為自体が人としての自覚を高め、生活に節を入れ、しっかりとした人生を送るコツでもあります。

先の調査によると、多くの人が死者と生者には深いつながりがあると感じているようです。このつながりの感覚が強い人は、孤独であるはずがありません。自分はいつも亡き父母、祖先と一緒に生きていると感じられるからです。

苦境に陥った時に必要なことは一人でも多くの「味方」をつけることです。亡き親祖先を心に蘇らせた瞬間、「亡き人」は「無き人」でなくなり、大いなる味方となって、私たちの心を支えてくれることでしょう。